

佐藤春夫と一九一〇年代（四）

——ニーチェ・鷗外・大石誠之助との関わりをめぐって——

石 崎 等

一、『或る女の幻想』の位置

一九一〇年代の言論圧迫を強いられた時代状況下、大石誠之助らの刑死について緘黙と「大逆事件」そのものの隠蔽が行なわれた。すでに考察してきたように、『阿部一族』批判を見る限り、『愚者の死』の詩人の鋭い感受性は、わずかに大石の心の扉をこじ開けているように思われる。佐藤春夫は、批評を通じて鷗外の歴史小説における客観的理性から主観的理性への転換をこころみようとした。そして『阿部一族』を論じて、一七歳の長十郎が、殉死後に老母と若い妻が手厚く養われることを信じて心置きなく切腹していったことに触れ、〈非情〉とは言わないまでも、それがあまりにも人間性を逸脱した不自然な行為だと疑念を表明し、畑十太夫の臆病さについても同様の批判を展開した。二人とも〈習俗的に誇張された人物〉だとしたのである。そこには〈習俗〉は文明化されねばならないという視点からの批判、つまり鷗外の考える歴史的眞実——〈自然〉を重視した〈歴史其儘〉の文学観とは

相容れない小説倫理のけざやかな姿があった。

佐藤春夫と大石誠之助は、年齢差があるものの、古代以来、複雑な歴史が折り畳まれた新宮というトポスを共有し、同時代に生きた人間である。大石の理想主義的社會主義の言説は、鷗外の歴史小説批判をはるかに超えた佐藤春夫の批評の根幹として永く呪縛することになっていった。そういう意味では、小林秀雄―中村光夫の先駆的な批評の水準は『日本人脱却論』の序論』に始まり『新らしき歴史小説の先駆「意地」を読む』に至る佐藤の批評の根柢に到達していないのである。

鷗外と大石誠之助を結ぶ線上に医者の子でありながら医者になろうとはしなかった佐藤春夫がいた。佐藤春夫の批評は、鷗外・大石誠之助という存在への接近と離反とによって練り上げられていった。それは師の生田長江や先輩の与謝野寛らへの接し方とも違っていた。核心には、京都・奈良という中心の周縁に位置しながらも、文化の古層が太く根づいた新宮という風土と「大逆事件」の影があり、ニーチェの『ツアラトウストラはかく語りき』と自己の周囲に生起したいくつかの〈死〉、〈武士道〉や〈殉死小説〉

などへの関心が渦巻いていた。鷗外・大石誠之助という存在はそれらの問題を明瞭化する触媒の役目を果たした。

われらすべては、古き偶像の名誉のために、身を焼かれ、炙られる。

われは、没落してゆく人々を、わが全愛もて愛する。それは、かれらが、彼方へと越えゆく人々であるからだ。(初訳『ツアラトウストラはかく語りき』「新旧の表板」)

『ツアラトウストラはかく語りき』には強烈な自由を希求する暗示的な言葉が躍動している。「大逆事件」によって自我が苦境に陥っていた佐藤にとつて、長江訳『ツアラトウストラはかく語りき』は読み替え可能な慰藉の書としての意味を持ったであろう。日露戦争以降、若い表現者たちは〈新旧〉の思想の間で苦悩した。草平を含めて佐藤らの世代が鷗外と対決しようとした根拠は〈新〉に対する曖昧さにあった。新道德の先駆者は、つねに旧道德の祭司(強権指導者)らによって犠牲に供せられるが、彼らはつねに〈彼方へと越えゆく人々〉であるがゆえに〈全愛もて愛〉されなければならないというニーチェのメッセージは魂を震撼させたことだろう。それはある意味でリングスに通じている。

しかし佐藤春夫は二度と再び、鷗外の殉死小説と本格的に取り組むことはなかった。社会主義運動が〈冬の時代〉に入るとともに、佐藤春夫の「大逆事件」への関心も次第に薄らいでゆく。大石誠之助が再び浮上してくるのは『新らしき歴史小説の先駆「意地」を読む』が書かれてから四年後、沖野岩三郎の『煉瓦の雨』

を始めとする文学活動の刺激を受けて書かれた『或る女の幻想』(一九一七・一二『中外』)の登場まで待たなければならなかった。そして三たび鷗外と取り組むのは(森林太郎が日露戦争従軍記念詩歌集うた日記に関する筋記)という副題をもつ『陣中の豎琴』(一九三四年六月、昭和書房)において、満州国が帝政を実施した直後、蘆溝橋事件が起きる三年前のことであった。

ところで、夏目漱石は自伝小説『道草』(一九一五)の主人公健三を〈帰って来た男〉と呼称している。所謂洋行帰りを象徴することばである。佐藤春夫のいくつかの小説の主人公もまたそうした設定が多い。彼らは建築家であり、都市計画に興味をもち、その技能が付与された詩人的で風変わりな人物として描かれている。たとえば、『美しい町——画家E氏が私に語った話』(一九一九・八、九、一一『改造』)の川崎・ブレントノヤ『指紋』(一九一八・八『中央公論』)の素人探偵役のR・Nが想起されるだろう。両作には『或る女の幻想』の登場人物のひとりと想定される西村伊作の末弟である大石七分(一九九〇〜一九五九)の存在が大きな影を落としているように思われる。七分は伊作の六歳下、佐藤春夫より二歳年上であった。佐藤の『F・O・U』の素材提供者とモデルは七分であることが明らかにされている。『或る女の幻想』も直接・間接的に伊作の弟である真子(一九八七〜一九二五)と七分の影が落ちている。真子については、一九〇九年四月から八月まで、大石誠之助の自宅兼病院に医局生という名目で滞在した新村忠雄が新宮を去るとき、別離の大石宛の書簡の中で(真子)と偽名を使ったことでも知られる。ある意味で大石一族は何かと利用されやすい象徴的なエピソードといえるだろう。

以下、《佐藤春夫と一九一〇年代》という主題の締めくくりとして、沖野岩三郎の『煉瓦の雨』と対比させながら『或る女の幻想』の意義を論じて佐藤の（転向）に及ぶことになるだろう。

『美しき町』（一九一九・一二、天佑社）を刊行し、作家としての位置を不動のものにした佐藤春夫は、一九二〇（大正九）年一月八日、春陽堂から『佐藤春夫選集』を出版する。収録するところの小説は、『指紋』『指紋／附録月かげ』『海辺の望楼にて』『西班牙犬の家』『李太白』『お絹とその兄弟』『奇妙な小説』の七篇。一週間で再版となっている。奥付には「佐藤春夫著作目録」が付され、そこに宣伝を兼ねて『病める薔薇』（第四版・天佑社）『お絹とその兄弟』（第六版・新潮社）『改作田園の憂鬱』（第三版・同）『佐藤春夫選集』（新刊・春陽堂）『美しき町』（新刊・天佑社）『挿話集』（近刊・春陽堂）の六冊が掲げられている。おおむね好評を印象づけるキャッチ・コピーである。ただし、『挿話集』はどういう理由からか、春陽堂から出版されることはなかった。

このうち、『お絹とその兄弟』（一九一九・一二）は「新進作家叢書」⑩に収録されたもので、表題作のほか、『青白い熱情』『或る女の幻想』『雄子の炙肉』『或る父と子』『私記』の五篇が収められた。（芥川龍之介、佐藤春夫が新潮社から最初に出版した本が、いずれも『新進作家叢書』の中の一編であったことから、この叢書に名を連ねることによって「文士の看板」を取得できる、と巷間に喧伝される。）（『新潮社八十年図書総目録』一九七七・一〇）とあるように、佐藤は一流文芸出版社から短篇集を出すことによって、新進作家として順調な滑り出しを見せたのである。『佐

藤春夫選集』が一週間で再版されたのも、与謝野寛・晶子の支援者であった小林政治が出資する小出版社の天佑社から出ていた『病める薔薇』収録の『田園の憂鬱』未定稿が、間を置かずに、大正八年六月、『改作田園の憂鬱』として同じ新潮社から出版されたのも、作家としての人気と一定の評価を得たことを意味する。同様に『お絹とその兄弟』も『改作田園の憂鬱』も短期間に版を重ねている。

『佐藤春夫選集』に収録された作品は、第一小説集の『病める薔薇』（一九一八・一一、天佑社）から『指紋』『指紋／附録月かげ』『西班牙犬の家』『李太白』の四篇、それに『お絹とその兄弟』、新たに『海辺の望楼にて』と『奇妙な小説』の二篇を加えて七篇の構成となっている。

こうしたやや混沌とした佐藤の文業から、唯一、「大逆事件」の影が落ちている作品が、一九一七（大正六）年二月、雑誌『中外』に発表された『或る女の幻想』である。『中外』を手にすることのできなかった読者は、単行本の『病める薔薇』か『お絹とその兄弟』によってこの短篇小説を読むことができた。

『或る女の幻想』は、やや複雑な経緯をたどって成立している事情がある。それは、佐藤の最晩年、中村光夫と戦わされた「うぬぼれかがみ」論争において明るみになることとなった。煩をいとわず、中村への反論をこころみつつ佐藤が展開した回想の中から重要と思われるものを箇条書きしてみる。

①『病める薔薇』は文壇で認められず、続篇約五〇枚は『黒潮』に不掲載となり没書となった経歴をもっている。

②その理由は「早稲田方面の抗議」にあったためで、「僕は出

鼻から文壇朋党の血祭りに上げられたやうな形であった。」

③ 谷崎潤一郎に『田園の憂鬱』の構想を語ったとき、激励を受けた。

④ ちよどその頃、生田長江が『中外』の穴埋め原稿として五六〇枚の小説執筆を紹介してくれた。

⑤ 『或る女の幻想』は、「かねて田舎で聞いてゐた大逆事件余話ともいふべき世話語を書いた」ものである。

⑥ 「軽薄児」たる自分は、「あの一作で軽佻にもジャーナリストとしての才能をちよつぱり働かせたにすぎない」のだが、「間違ひなしの駄作」である。

⑦ しかし「力を注がない駄作凡作のなかにも作者は棲息してゐるといふのが僕の考へ」である。

⑧ 長い前置きは、言い訳代わりに付け加えられたもので、「一種のシャータリズム」に過ぎない。

⑨ 「あんな小細工を弄した奇道」を行つたのは間違ひであつた。

⑩ 「あれはやはり沖野牧師から聞いたとほりに、大逆事件で大きなショックを受けた地方の文学少女的田舎娘の実話としてルポルタージュ風の風俗小説にした方がわかりよかつた」。

⑪ 『或る女の幻想』の完成後、『田園の憂鬱』の執筆に専念しようとしたが思うように行かなかつた。

⑫ 『或る女の幻想』の稿料を得て、それを旅費にして新宮に帰省した。

自身による作品の冷静な回顧的位置づけである。①については、補足しておく必要がある。『田園の憂鬱』の原型で、その一部と

なる『病める薔薇』が発表されたものの、評判がかんばしくないと作者自身から受け取られたうえ、続稿を拒否されたことが、佐藤にとつて精神的な重荷となつたことは知られている。しかし『病める薔薇』がまつたく無視されたという佐藤の回想はやや被害妄想といえなくはない。また一九六一（昭和三十六）年一〇月、『新潮』に発表された評論『うぬぼれかがみ』に端を發し、翌年にかけて展開された「うぬぼれかがみ」論争によつて、佐藤と中村の不仲がはるかに前からあつたように思われている点も訂正しておく必要がある。中村は短い「佐藤春夫」論（初出未詳）を書いてゐる。『病める薔薇』から始まり『田園の憂鬱』を完成するまでの複雑な執筆経過に触れた後でこゝ述べてゐる。

しかしこの執拗な努力の過程は同時に作者の光榮の道でもあつたので、ことに「中外」に発表した『田園の憂鬱』が田山花袋、広津和郎に賞讃されたことは同じ年の七月に『李太白』を谷崎潤一郎の推薦によつて『中央公論』に発表し、八月には『指紋』を同誌にのせ、十一月には『お絹とその兄弟』をやはり同誌に発表したことなどと相俟つて、彼の作家としての名声を確立しました。（佐藤春夫、『中村光夫作家論集2』一九五七・二、講談社）

穏当な評価である。ただ中村は、初期佐藤文学について、全面的な肯定を示したわけではなかつた。その末尾で（同じ素材と手法の繰り返しはひとつもなく、作者の才能の幅の広さと、おそらく才能の過剰に由来する不安定な模索の状態」と指摘しているか

らである。〈不安定な模索の状態〉という言い方は、見方によっては、作家としての名声を獲得した『田園の憂鬱』から『お絹とその兄弟』へと至る作品のうち、どれが作家の本質であるのか、信任できないと読めるからである。

一三、佐藤春夫と沖野岩三郎

佐藤春夫の多方面にわたる「才能の過剰」は小林秀雄によって指摘済みのことであった。後年、中村真一郎は小林秀雄―中村光夫の評価軸を継承しつつ、〈鷗外の遊び〉との同調と離反のドラマを〈才能の「バラ銭」〉と称し、佐藤春夫文学の特質を次のように好意的に評価し支持を表明したのである。

佐藤春夫の、才能の「バラ銭」による浪費の先例は、やはり鷗外である。そして佐藤氏も鷗外の遊びを解すると同時に、自分の生涯を遊びに終らせてしまうことには、不満があった。既に『田園の憂鬱』の若き作家は、生粋の芸術家であり、鷗外やその直弟子の木下空太郎のように、文学を自分の人生の一部に限定して、文学と戯れる態度ではしに切れなかったのである。

（『文学としての評伝』一九九二・四、新潮社、二二三頁）

一般的には、多彩な才能の開花を作家へのオマージュとするのだが、中村光夫は小林の驥尾に付して、そのようにみようともしなかった。佐藤の不信感（作者の才能の幅の広さと、おそらく才能の過剰に由来する不安定な模索の状態）という小林―中村的

批評にあったといえるかもしれない。

しかし文学史的にみたととき、偏狭ともいえるそうした立場をとる文学史家は少ない。また菅野昭正の『憂鬱の文学史』（二〇〇九・二、新潮社）は『田園の憂鬱』出版から九〇年後に出た新しい評論だが、ヨーロッパ・モダニズムと〈近代的憂鬱〉を貴重な養分として、「大逆事件」以後の〈政治的運動とは微妙に距離を測りながら、デモクラシーの気運との情動的共感を柔軟に育てつづけていた〉（同著二五八頁）佐藤文学の本質を丹念にたどった力作である。もちろん小林―中村的批評の呪縛からは軽やかに脱構築が図られている。

文学史家の紅野敏郎は、『田園の憂鬱』の原型となる『病める薔薇』が発表された雑誌『黒潮』について『日本近代文学大事典』第五卷（一九七七・一一、講談社）で次のように書いている。

総合雑誌。大正五・一―七・五。全一九冊。編集発行人はじめ泉新、のち鎌田実。太陽通信社発行。創刊号の裏表紙にはKuroshio、第二号よりKokuchōと刷りこまれている。（中略）文芸の方面では時局の匂いはきわめて少なく、明治以来の自然主義作家、大正期の白樺派、耽美派、新現実派、新早稲田派、女流作家などがほとんど動員されている。第一等の作は九〇ページ近い分量を一挙に発表した志賀直哉の『和解』（大正六・一〇）である。（中略）それよりさき直哉はこの「黒潮」に漱石に捧げた『佐々木の場合』（大正六・六）も発表していた。その同じ号に佐藤春夫は『田園の憂鬱』の第一稿の前半にあたる『病める薔薇』を発表、大正文学の名作『和解』と『病める

「薔薇」の掲載誌という点のみでも忘れがたい雑誌といえることができる。(中略) 大逆事件後の新宮を背景にキリスト教徒の迫害を扱った沖野岩三郎の『煉瓦の雨』(大正七・二)も掲載された。(後略)

『病める薔薇』と沖野岩三郎の『煉瓦の雨』が掲載されていることは興味をそそる。しかし、⑤と⑩で言及されているように、佐藤と沖野の関係はいつごろから生じたのであろうか。沖野が主宰した雑誌『サンセット』(一九一〇・二創刊、同年六月終刊、全五号)には佐藤は寄稿していない。雑誌の全貌については、紅葉敏郎『大逆事件前夜の「新宮」——『サンセット』のこと』(『国語と国文学』一九七八・一二、のち『文学史の園』一九一〇年代)へ一九八〇・四、青英舎、増補新編、一九八四・九)に収録)が詳細で参考になる。

沖野岩三郎は新宮の出身ではないが、一九〇七年、新宮教会の牧師として赴任して以来、大石誠之助と深く交わり、「大逆事件」に際しては危機一髪のところを難を免れ、その後「大逆事件」に連座した高木顕明・崎久保誓一の弁護のために奔走し、与謝野寛を介して平出修を選任しているが、このあたりから与謝野寛・晶子と佐藤と沖野の深まりが生じたと推測される。一九一五(大正四)年三月、佐藤春夫は与謝野晶子の熊野旅行の案内者として帰省している。そのとき佐藤は同棲していた芸術座の女優の川路歌子を同道した。

「大逆事件」裁判以来、晶子を新宮に迎えるに当たって沖野が果たした役割は小さくはなかった。すでに塚本章子や辻本雄一な

どによって指摘されているように、晶子の熊野旅行の目的のひとつは大石誠之助の未亡人を慰めることであった。また翌年の一〇月には、大石の未亡人多いとその子供を東京に招き聖書学館に入る世話をした。沖野が正式に上京、芝区三田四国町のユニテリアン教会で三並良のもとで副牧師となるのは、一九一七(大正六)年六月のことである。その前年、沖野はまた新宮教会にいて、満を持して自分の体験譚『生を賭して』を『六合雑誌』(五月、七月、九月)に発表し、一月には『大阪朝日新聞』の長篇小説懸賞応募を知り、『宿命』を鋭意執筆し作家への道を模索しつつあった。『宿命』は「大逆事件」前夜の大石誠之助を中心とした新宮の社会主義運動を描いた長篇意欲作であった。沖野が『生を賭して』を発表し始めた大正五年五月といえば、漱石の『明暗』が東京・大阪両『朝日新聞』に月末から連載され始め、荒畑寒村の短篇集『逃避者』(東亜堂書店)が出版された月である。一月に江口渙を通して芥川龍之介と知り合った佐藤は、五月末に川路歌子とともに神奈川県筑郡中里村に転居して田園生活を実践し、『田園の憂鬱』の構想を練りつつ文壇登場へのチャンスをおかっていた。

一四、『煉瓦の雨』あるいは大星家(大石家)の悲劇

ここでしばらく、沖野の第一作品集『煉瓦の雨』にこだわってみたい。この小説を主題とした作品集『煉瓦の雨』は、巻末に異例ともいえる与謝野寛、佐藤春夫ら二人の「煉瓦の雨の後に」という総題の跋文が付されて、一九一八(大正七)年一〇月一日、

福永書店から出版された。『煉瓦の雨』以下『指相撲』『髪』『親』『転宅』『侵入者』『自転車』『彼の僧』『山鼠の如く』の九篇の中

短篇小説が収録されている。各々の文末の脱稿日とおぼしきメモによれば、上京した数ヵ月後の一九一七年一〇月中旬から翌一八年春にかけて約半年の間に執筆されたものである。作品集は、〈紀州〉を舞台にした〈紀州もの〉が『煉瓦の雨』『指相撲』『髪』

『自転車』『彼の僧』『山鼠の如く』、東京を舞台にしたものが『親』『転宅』『侵入者』。うち『指相撲』『転宅』『侵入者』の三篇は男女をめぐる隠微な噂や同性愛や独身と結婚の狭間で生きる教師の人間像を描き、『親』は私生児として生れた主人公〈音無 沖野〉自身の生命哲学ならびに母親との関係が与謝野寛・晶子の前で明らかにされる。『髪』『彼の僧』は僧侶ものであるが、ともに被差別問題が取り込まれている。『髪』における小物語の連鎖とプロットの展開は、素材が面白いだけに綿密に書き込めば面白い長篇になる可能性を秘めていたのだが、力量不足は否めなかった。それにしても、『煉瓦の雨』は東京を舞台にしているものを含めて南紀地方のローカル・カラーをたっぷりと湛えた異色の作品集といつてよいだろう。登場人物はほとんどが紀州人であり、何かと〈紀州〉という風土に回帰していく点が特徴である。

「大逆事件」に関して、日本人の多くは、われわれの敵をもわれわれの同胞として愛する（擁護する）という寛容なかたちをとらなかつた。刑徒たちの中には僧侶やキリスト教に親炙した人もいた。しかし信仰を同じくする人間ですら刑徒たちに対して忌避的な態度を取らざるを得なかつた。新宮の僧・高木顕明は真宗大谷派教団から追放された。全国に及んだ弾圧は苛烈を極め陰湿な

様相を呈し人々の迷妄はそれを助長した。連座した同志たちの仲間とその遺族は悲惨な境遇に追いやられた。

『煉瓦の雨』は西村家と大石家の歴史と「大逆事件」の犠牲となつた大石誠之助の悲劇を背景にした小説である。「大逆事件」をめぐる言説の多くは摺伏させられるが、沖野は西村家に水源をもつ巨大な財力がやがて悲劇を胚胎することに着目した。婚姻によつて二つの家が結合する。しかしその結合は土俗的な旧慣とキリスト教という新旧両思想の衝突によつて瓦解し、新しい生を生きようとするカップルに偶然ともいえる悲劇が見舞う。一八九一（明治二四）年一〇月に起きた濃尾大地震である。

遺児のひとりとは財産維持のための養子縁組によつて莫大な遺産相続者となる。恵まれた家族の形態が叔父（大石誠之助）と甥（西村伊作）という新たな結合を生む。その背後には、保守的な当主である西村もんの犠牲的な精神と革新的な知識人として知られた大石誠之助との間に取り交わされた和合協調があつた。それは旧世界に生き広大な山林財産を継承した西村もんから近代医学の体得者であり社会主義に覚醒した大石誠之助への或る権威の委譲を意味した。その秤の支点にいた人物が西村伊作にはかならなかつた。——こうした〈西村—大石〉家の神話的ともいえる世界を背景にして『煉瓦の雨』は誕生する。したがつてこの小説には、語られないできたものを語らねばならないという沖野岩三郎の使命感が溢れている。

本書出版に寄せた西村伊作の文章「痛い程切実な」によれば、〈数年の間に私の家の椅子に何千回腰を掛けた〉と誇張されて書かれてるように、沖野岩三郎は西村から徹底的に一族の歴史を

聞き出そうとしたらしい。そうした意味では聞き取り小説といえるだろう。また西村のほうも（何も彼も私の心に持つて居る物を皆喋りました、私の心の底と私の家のすべてのこと、親のこと、祖母のこと、家に起つた事件、自分の生ひたち、大抵の人は多く秘密として云はないこと）のすべてを厭うことなく語つたらしい。『煉瓦の雨』を読んだ西村は（何のほむることなく、また誹ることなく、卒直に受け入れて卒直に表現せられたこと）を喜んでゐる。それだけ「大逆事件」後の西村・大石一族の結束は固く、沖野と信頼関係で結ばれていた。異様ともいえるモデル小説である。

登場人物の名前が愛称・通称あるいは屋号などで呼ばれているために分かりにくい。しかしすべて実在した人物名に戻してしまつたらこの小説がもつ雰囲気がち壊されてしまう。両家の歴史の詳細は、森長英三郎『祿亭大石誠之助』（一九七七・一〇、岩波書店）第一部「大石の一族」や黒川創『きれいな風貌 西村伊作伝』（二〇一一・二、新潮社）を見られたい。ここではあくまでも『煉瓦の雨』に即して、小説の持ち味を活かしつつ、適宜変換をこころみながら論じていくことにする。

沖野岩三郎は大星家（大石家）の神秘化に多大なエネルギーを注いでいる。主人公の大星ドクトル＝大石誠之助の風貌を（一種の空想家、理想家といふべき人で、兎に角世に類の無い事をやりたがる人）へ何につけても人の意表に出でやう、先鞭を著けやうといふ功名心は随分熾（さか）であつた。と描いている。これが（大星＝大石）家の宿命の原点といえはばいえるだろう。

寛潤な紀州の風土に育ち進取の気性に富んでいた大星庄平（大

石余平）は、山林王で百万長者である東家（西村家の当主である未亡人のお鶴婆さん＝西村もん）の娘である一八歳雪子（ふゆ）と結婚する。お鶴婆さんの一粒種の吾一は早世した。二人の間には長男エノク（西村伊作）、次男ピリポ（真子）、三男シモン（七分）の子供がいた。東家には、お鶴婆さんに気に入られていた谷奥の庫蔵が雪子との縁談を望んでいた。クリスチャンを嫌っていたお鶴婆さんは雪子の復縁を願ひ、庄平は、裁判に敗訴し、東家の後見人から排除されるが、雪子は実家に戻ろうとはしなかつた。熱心なクリスチャンである大星庄平は新宮に土地を買い、そこに教会堂を建てて寄付した。庫蔵はお鶴婆さんをそそのかし、庄平と雪子の結婚を憎み、何かと二人の仲を裂こうと画策するが、それも悪あがきにすぎなかつた。

やがて二人は名古屋に出で熱田神宮の近くに住み、周囲の迫害を受けながら信仰生活を続けるが、濃尾大地震の際に子供たちを残して死んでしまう。これをめぐつて両家の確執が始まる。大星家と東家つまり（お鶴婆さん・庫蔵）との冷戦状態はしばらく続くことになる。

一五、『煉瓦の雨』の構造

大星家（大石家）は新宮の士族階級ではなかつたが、一統の気位は士族以上に高く、理財に長じていた。庄平を筆頭に、楓（くわ）、盛久（西久）。通称（土岐屋）。裕福な玉置家に養子に入り、息子にヨエルとダニエルがいた、三千代（睦世、井手家に嫁ぐ）、ダダさん（大星ドクトル＝大石誠之助）がいた。

父親の進歩的な精神を継いだダダさんは、オレゴン大学に学び、インド留学から帰国した新宮きつての知識人であった。東家の親戚から難癖をつけられて追い出され、一八九一（明治二四）年一〇月二八日、名古屋英和学校での祈祷中、煉瓦の雨を浴びて非業の最期を遂げた兄夫婦に同情し、東家への憤慨をあらわにした。家運が傾き、その淋しい荒んだ心を癒すということもあって、大和のお鶴婆さんの許に身を寄せていたピリポ、シモンの二人の甥たちを強引に新宮に取り戻し、新しい教育を身につけることを考えていた。

ダダさんは一七歳のちゃちゃさん（ぬいさん）と結婚し、哲子と丈太郎の子供を儲けた。ちゃちゃさんの家は堀部安兵衛が出た中山家が祖先であったが、ちゃちゃさんは二三のときから奉公に出て苦労をした女性であった。

ダダさんとエノクとは叔父・甥の關係にあつた。エノクは西村家の養子となり、莫大な財産を継承した。のち別荘を建立し、そこに石井柏亭を招き「N（西村）氏の一家」という文展出品の絵を描かせたこともあつた。

この小説は、新宮きつての新知識人大星ドクトルⅡ大石誠之助の演じた悲劇が、東京に移り住んだその遺児である哲子と丈太郎に向けて、作者自身を示す音無信次Ⅱ（私）という語り手によつて明らかにされるといふ構造を持ち、ドクトルの妻であるちゃちゃさんは、大星一族からの好意を断ち切つて、音無信次Ⅱ（私）に相談して尼僧になろうとして上京、その遺児とともに東京のアグネス修道院に入るところで終わっている。ちゃちゃさん母子は八年間音無の世話を受けて生活してきたわけである。

こうした枠組みの中に、大星Ⅱ大石家の数奇ともいえる歴史が織り込まれている。

事件の核心は時局柄具体的に語られてはいない。すべての封建的なしがらみを突き抜けるような奔放な生き方をするドクトルとお鶴婆さんとの対話の中に悲劇が暗示されている。その悲劇とは、哲子さんが七歳のときの二月、父親が（一握の灰になつて帰つて来た）と語られる事件——「大逆事件」にはかならなかつた。両家には沈鬱な雰囲気か漂い、大石を中心に成石兄弟をはじめとして最大の犠牲者を生んだ新宮の町は、社会主義者やクリスチャンばかりでなく、佐藤春夫の『愚者の死』の言葉を借りれば「わが郷里なる／紀州新宮の町は恐懼せり」という雰囲気であつた。『煉瓦の雨』の現在的な意義はここにある。

医者として成功したダダさん一家に対する嫉妬や猜疑心は生前からあつたわけだが、他家から来たちゃちゃさんへの風当たりはとくに強かつた。ダダさんの死後（ピリポさんやシモンさん達の不意な言葉）に傷つけられることもないわけではなかつた。しかし一方作者は、（エノクさんやピリポさん達の顔から数限りのない喜びの霊）が躍り出すことを認め、一九年前の悲劇、つまり（庄平さん夫婦の悲劇を打ち消し乗超えて別の世界に突進して居る）として、バランスをとつた表現をしている。子供心に生まれた不意な言葉が暗だとしたら、成長するに及んでエノクやピリポたちの（数限りのない喜びの霊）は明としてちゃちゃさん母子の未来を祝福しているかのようだ。しかし、エノクやピリポたちもまた、大星Ⅱ大石家の親族として「大逆事件」の余波をまともに浴び、言い知れぬ被害者であつたという視線はここにはない。

ただ大星ドクトルの（二時の滑稽）（一つの小さい滑稽）あるいは（戯談）が悲劇を招くという、二人の遺児（哲子・鱒と丈太郎・舒太郎）への教訓の語られ方は、作者の立場と発表の時代背景を考慮しても微妙である。それはピリポが飼っていたメジロをエノクが塩を食べさせて死なしたのを、ドクトルがエノクを庇って自分が食べさせて死なしたのだというエピソードを例にして語られている。作者は、ドクトルとその甥たちの少年時代の記憶の中に生きるドクトルの言動を次のように再現している。

『子供の時にした事は中々忘れないものだ。僕は子供の時、ピリポが飼つてあつた繡眼児に塩を食はせたのを、清の叔父さん（注・ダダさんつまりドクトル）に見付けられてね、彼の時は本当に悪い事をしたと思つたよ』とエノクさんが言つたのを哲子さんは覚えて居るでせう。しかしピリポさんも今に其事を怨んで居るのは当り前でせう。何故ならダダさんが『あれは祖父さんが食べさせたのだよ』と判然言つたのだもの。こんな事は何でも無い様な事だが、決して小さい事では無いのです。繡眼児が膨れて死んだのは事実だ。夫れが塩を食べさせられたといふ事も事実らしい。そして『あれは叔父さんが食べさせたのだよ』と言つたのはダダさん自身の口から出たのである。此の三つの事が揃つて居れば、仮令夫れがダダさんの一時の滑稽であつたにしろ、實際ダダさんは其の繡眼児を殺した悪人となるのだ。（単行本『煉瓦の雨』四九〜五〇頁、傍点引用者）

沖野はまるで『聖書』の中の話を牧師が教訓として信者に語つ

ているかのようなのである。エノクの言葉より重いダダさんの（一時の滑稽）がもたらした言葉、その不可避といえる重大な意味の指摘。これは子供への訓えとして通用するであろうか。しかし私が「作者の立場と発表の時代背景を考慮しても微妙」だと考えるのはさらに次のような一節が書きつけられているからである。

こんな（一つの小さい滑稽）を言つた事から、ダダさんを変な残酷な人だつたと言はれても夫れは人間の間に法律があり裁判のある以上は止むを得ない事である。繡眼児が死んだといふ事実。塩を食べさせられたらしい鑑定。そしてダダさんが實際夫れを食べさせたのだと言つた証言。此の三つが揃つて居るのだから、世界の法律や裁判といふものは、これを罰する力があり理屈があるのだ。『虚言から出た真実』といふのは此事だ。

私はあなた方に言つて置きたい。我々は戯談だつたのだと言つて責任を免るゝ事は出来ない。又た夫れは事実が間違つて居るから其事は冤罪だなど、云ふ事も出来ない。だから我々人間はどんな事で大罪人の様に思はれたり大悪人の様に言はれる事があるかも知れないのだ。（同前、五〇〜五一頁）

『煉瓦の雨』の核心はこの部分にある。しかし『虚言から出た真実』という文意は、佐藤春夫が『愚者の死』で引いた場合とも違つている。また大石誠之助が『獄中にて聖書を読んだ感想』中で漏らした感想とも違つているのである（二九、獄の裡、獄の外

——大石誠之助と佐藤春夫——参照）。

沖野は近代刑法学の立場から〈事実〉〈鑑定〉〈証言〉三者を総

合し、ドクトルルダダさんが〈悪人〉で〈残酷な人〉であること
を容認する。この際、キリスト教の律法など何の意味をなさない。
弟が飼っているメジロが誰かに塩を盛られて死んだという事実は
紛れもない。兄はそれを叔父に見つけられるが、叔父は兄を庇つ
て自分のせいにする。作者はそれを〈一つの小さい滑稽〉と解釈す
る。犯人は兄だが、叔父が自分だという言葉Ⅱ〔証言〕を発して
しまえば、それが〈事実〉として犯罪の根拠となるという論法で
ある。

しかしここでドクトルルダダさんとして語られてきた実在の大
石誠之助に戻していえば、処刑直前大石が堺利彦に洩らしたと伝
えられている事件の真相を見据えた『虚言から出た真実』という
言葉は正しい位置（正当な文脈）に置かれているといえるであろ
うか。〈罰する力〉は絶対なのだろうか。そして作者の苦しい表
現の裏から垣間見られるこの言葉は、大石にとつて〈責任〉や
〈事実〉や〈冤罪〉が思想的に検証され再考されることなく、ま
た何らの救拔もなしにテクストに落ち着くことが許されるであろ
うか。大石の子供への説明は教えとしても諭えともある異和
感を伴う。そこには法を守るフィクションとしての権力への疑い
が稀薄だからだ。だからといって沖野の小説が無価値であるとい
うものではない。苦しい表現の中に真実を伝えようとする真摯な
姿勢がうかがわれ、「大逆事件」小説として不滅の価値を有して
いる。与謝野晶子は〈大星ドクトルの死を叙して、その死因を云
はない作者の用意に到つては、明治大正の歴史を背景とした大き
な謎の涙堂ではありませんか〉（『凡人的な微笑』）と同情と理解
を示した。しかし別の視点からみれば、そこには偶然運座を免れ

たアポロギーの匂いが感じられなくはない。

このように考えてくると、佐藤春夫は、大石誠之助との距離を
はかり、「大逆事件」後、沖野岩三郎や西村伊作・七分らとの交
際の中から得た情報をもとに、〈S・O一族の二青年〉を別の角
度から照明を当てて『ある女の幻影』に仕立て上げたということ
になる。そしてそこには、同郷人沖野の文学への批判とともに、
自ら背負った「大逆事件」への（これまた別種の）アポロギーの
影が潜んでいたといえなくはないのである。佐藤も沖野もそれだ
け事件の捕囚となり呪縛されていたことになるだろう。

私はあなたが、今まで既に得られた思想ばかりで満足せられ
ずに、この激刺たる人生のなから、いろいろさまざまな清新
な考を汲み出されるであらうことを望みます。悪魔と神との葛
藤を、さうして時に悪魔が神の天使であることを、もつと確
実に認めやうではありませんか。（佐藤春夫「手紙を以て跋に
代へます」）

あなたの善悪の標準には、耶穌教的に既に固定した考を先入
主にしたやうな或る者があります。私はあなたの作品の全部に
もう一息といふやうなはがゆさを感じるの、その根本がここ
ではないかと思ひます。さうしてそれは現実主義者として、又、
真の理想主義者として最も重大な欠点でせう。（同前）

「一九一七年、八月三十日」という日付があるが、「一九一七
年」は「一九一八年」の誤記であろう。沖野文学にあるキリスト
教的な善悪観の臭みを批判し、その〈現実主義〉も〈理想主義〉

もまだ不十分であり、真も美も浅く善のみが横溢しているという診断は間違っていない。しかしそこにこの時期沖野が抱えていた煩悶の根柢があったのだとしたら、それを低いアングルで見ようとすべきではないだろう。しかも『煉瓦の雨』という作品集全体に〈悪魔と神との葛藤〉を要求すること自体批評精神を放棄しているといえる。自分の美や信の基準で、沖野に善悪をひっくり返して墮天使になれとでもいおうとしているのだろうか。いや、善はいいとして悪の力をも虚構に求めるべきではないかと問ひ質したのである。しかしなぜ『煉瓦の雨』の執筆意図に眼を向けようとしなかったのかという疑問が依然として残るのである。

本の装幀をした富本憲吉は表紙にアーチチョークの書を描いた。富本によれば、狂気の徴候を示す直前のツアラトストラが医者者に勧められて食べたとされる花の実だそうだが、私は『ツアラトストラ』のどこにそれがあるかは未確認である。これを譬話として借用すれば、佐藤も沖野もアーチチョークの書を前にして食べるべきか食べきではないかと逡巡していたわけであり、そこに大差などありようはなかったといえなくはない。富本憲吉は沖野に気に入られていたのか『宿命』の装幀も手がけていた。(以下、次号)

注

- (32) 佐藤には岩上順一が『歴史文学論』(一九四七・一二、文化評論社)で指摘した〈殉死〉による新しい家督相続の問題(階層内部に於ける再編成)という視点が無い。〈家〉と〈忠義〉を担保する〈殉死〉が持っている意味を軽視してい

る。死者への祀り(とその儀式化)は家集団の結束となり、〈殉死〉そのものを聖化する。〈忠義〉によつて家集団の浮沈つまり家の没落と繁栄が、次の殉死へ向けて一層の〈忠義〉競争を激化させることになるからだ。そうした家同士の打算が一種の戒律として働かなかつたとはいえないからである。以来この問題は避けて通れないのだが、こうした問題系を重視することは歴史学の顔色をうかがうことになり〈意地〉という総題を冠した鷗外のねらいから外れる。しかしそれは佐藤が〈意地〉を軽視していることとは関係がない。

- (33) 因みに岩波文庫版『ツアラトウストラはこう言った(下)』(氷上英廣訳)では、長江訳の該当箇所は次の通り。《われわれはみな古い偶像たちの栄えのために、焼かれ、あぶられる。》《わたしは没落して行く人たちを、わたしの愛情のすべてを傾けて愛する。なぜならかれらこそ、かなたへ渡つて行く人たちなのだから。》(古い石の板と新しい石の板)六同書、九八頁。

- (34) 石田アヤ「佐藤病院の春夫さん」(カラー版 日本文学全集 佐藤春夫)〈一九七〇・五、河出書房新社〉「しおり39」。ここでは大石七分は「S叔父」として回想され、次のように書かれている。《春夫氏も東京から新宮に帰つてこられると、その頃は珍らしい洋式建築の西村〔注・伊作〕の家に来られては、牧師の沖野岩三郎氏や他の町の文化人達と母の手造りのケーキやコーヒーの出される応接間に集つては煙草の煙の層を棚引かせながら、絶えることのない会話と笑い、とき折の爆笑に午後や晩の時間を過されるのだった。》

(35) 文末には「(十一月十一日未定稿)」という言葉がある。本稿では『病める薔薇』所収のテキストを使用した。なお、池田浩土編『蘇らぬ朝「大逆事件」以後の文学』(二〇一〇・一二、インパクト出版会)所収のテキストは初出に拠っている。

(36) 『佐藤春夫論』(一九三四・六『文学界』、『小林秀雄全集』第四卷(一九六八・三、新潮社))。そこで小林は「才能の濫費者」と指摘している。なお、小林には、先行する批判的な佐藤論として「佐藤春夫のザレンマ」(一九二六・二、『文藝春秋』)がある。

(37) 塚本章子「晶子と寛、大逆事件の深き傷跡」(二〇〇七・一一『日本近代文学』第七七集、辻本雄一「与謝野寛の詩『誠之助の死』成立にみる、晶子の『大逆事件』」(二〇一一『熊野誌』第五八号)。

(38) 宗教集団内での復権が進み、二〇一二年一月、菅原龍憲・鈴木磐により高木顕明の評伝『謀叛——大逆事件一〇〇年——』(DVDビデオ版)が制作された。

(39) 『煉瓦の雨』は文壇外の評価のほうが高かった。因みに一例を掲げる。

《私が沖野君の「煉瓦の雨」を読んで何とも言へぬ嬉しさを感じたのは、其中に現代の世界を支配しつゝ、ある大思想が閃めいてゐるといふことであつた。然らば世界の思潮とは何であるか。私は第一に基督教、第二に社会問題と答へたい。今日の所謂デモクラシーも要するに基督教といふ土に培養せられた花である。同時に社会問題はデモクラシーの精神を社会

のあらゆる方面に適用せんとする努力に外ならぬ。若し基督教と社会問題といふことを考へて「煉瓦の雨」を読めば如何にもと頷かれる点がある、沖野君は単に宗教や社会問題を題材として取り入れたといふのではない。実に此世界思想に対して深い同情を有してゐる。私は文学に對する知識を有たないから技巧として見た沖野君の創作にどれだけの価値があるか知らない。然し其作品の中に流れてゐるヒュマニテ어의思想は如何にも神々しいものであると私は感じた。》(安部磯雄、初出未詳、『宿命』に付載された広告文から)

安部磯雄や岡田哲蔵は『煉瓦の雨』を明治強権政治による社会主義—無政府主義弾圧の苛烈さと暗黒裁判への抵抗言説として歓迎した。また内田魯庵や長谷川如是閑らは『宿命』に同様の関心と好意的な理解を示した。

(いしやまひとし・元本学教授)